

トロロップにおける “Female Quixote” 達

——後期政治小説を中心に——

玉 崎 紀 子

1

Trollope の描いた女性といえば、まず Henry James の追悼論文の ‘a simple maiden in her flower’¹⁾ が思い浮べられるであろう。Trollope のお気に入りである *The Warden* に続き *Barchester Towers* でもヒロインである Eleanor はまさにその典型である。彼女を知らない人にはその賞賛が誇張と思えるような²⁾ 美しさを持つと語られ、彼女はその可憐な性質の故に愛される野の花のような女性といえる。それは *Barchester Towers* で Eleanor の 3 人の求婚者を全て、一時は血迷わせる *femme fatale* 的 Madeline Neroni³⁾ が、誰もが一目見たとたん魅了される美貌で危険な抗がい難い性的魅力を持つのと対比される美しさである。大人しく上品な美しさをもつ Eleanor は、妹と話すように接し、その声の ‘sweetness’ にうたれるといった描写に示されるとおり、たとえ Victoria 朝社会で作りあげられたものにせよ、Victoria 朝の理想像そのものである。そして Trollope 初期の小説、特に ‘Barchester Novels’ に多く描かれるヒロインは、牧歌的な Basset の大聖堂のある町を背景に牧師の娘や妹、また田舎地主の姪といったこの Eleanor のようなタイプの中流の娘なのである。⁴⁾

彼女達は Richardson 以来のピューリタンの恋の伝統⁵⁾ を受け継ぐヒロインで、求婚されるまでは愛していると気づかないような純心な娘である。しかし愛の告白を受けると、自分も一目惚れだったとか、以前から深く愛していたのだと認めるのである。そこで *The Small House at Allington* の

ヒロイン Lily Dale は

She had an idea of her own, that as a girl should never show any preference for a man till circumstances should have fully entitled him to such manifestation, so also should she make no drawback on her love, but pour it forth for his benefit with all her strength, when such circumstances had come to exist.⁶⁾

と語られるし、一旦愛されていると知り、自分も恋していると認めると、あらゆる苦難にもめげず⁷⁾いじらしい忍耐によって恋を貫ぬき最後には Richardson の言う「美德の報い」⁸⁾を得て恋人と結ばれるのである。この Trollope の初期のヒロインに必ず使われるプロットはシンデレラの上昇婚という 18 世紀からのロマンスの枠組にそったものである。

‘Barchester Novels’ の第 3 作 *Doctor Thorne* のヒロイン、田舎の医師の姪 Mary Thorne は ‘oldest commoner’ である Greshamsbury の地主の娘達と共に家庭教師につき、いわば地主の娘同様に成長する間に、地主の長男と恋におち、身分ちがいと反対されるというよくあるロマンスのヒロインである。Jane Austen の *Mansfield Park* を思い出させるこのプロットは、⁹⁾ ヒロイン Mary が gentleman である Frank と結婚するにふさわしい lady だろうかという疑問を、Trollope の作品全体に関わる「紳士」の主題の一変形として提示するものである。いかなる富をもってしても彼女は屈しない。彼女が gentlewoman なら、彼女の ‘heart, soul, mind’ は世界一の富以上のものだからと考える Mary は、しかし ‘What makes a gentleman? What makes a gentlewoman?’ と悩まざるをえない。

What is the inner reality, the spiritualized quintessence of that privilege in the world which men call rank, which forces the thousands and hundreds of thousands to bow down before the few elect? What gives, or can give it, or should give it?

And she answered the question. Absolute, intrinsic, acknowledged, individual merit must give it to its possessor, let him be

whom, and what, and whence he might. So far the spirit of democracy was strong within her. Beyond this it could be had but by inheritance, received as it were second-hand, or twenty-second-hand. And so far the spirit of aristocracy was strong within her.¹⁰⁾

この Mary Thorne が母のない孤児で伯父と暮す状況は、小さな主婦となり、「家庭の天使」と呼ばれる優しい自己犠牲的な女性、しかも結婚の幸福をみじんも疑わず、結婚を当然として生きるという Victoria 朝の理想の女性像と一致し、Dickens など他の 19 世紀小説にも見られるものである。¹¹⁾ このように Trollope の初期の Barset のヒロインは求婚されるまで恋を知らない innocence, 恋の苦難にいじらしく耐える constancy, 家庭の天使的背景という点で、18 世紀からの伝統に従う Victoria 朝小説の一般的な特質どおりである。

2

後期の 'Palliser Novels' では、前期のおとなしい Barset のヒロインから変化し¹²⁾、自己主張し、自由を求め、結婚に疑問をもつ女性、さらに恋においては男性の告白を待つのでなく情熱的に恋を表明する女性が多く描かれることになる。その変化はあらゆる点で対照的な、前期ヒロインとの対比が明らかにするものである。たとえば Barset Novels においては Barset の田舎に住む 'pretty, little brown girls' と描写される美しさを持ち、Mary, Lucy のような単音節の愛らしい名前をもつ貧しい娘であるヒロインが、Tory 地主やその相続人と結婚するという物語なのに対し、Palliser Novels では 'fair, tall, handsome' と語られ、Glencora のような華やかな、凝った名前を持つ Whig 貴族かその姻戚の上流の heiress で若き Liberal の国会議員と情熱的恋をする。そして Barset の娘の constancy とは対照的に二人の男性の間で迷う娘が描かれる。従って後期の中で唯一人貧しい娘で constancy の故に恋人と結ばれることや Lucy という名前から言っても Barset 型と思える *The Eustace Diamonds* の家庭教師

Lucy Morris さえもが、Frank に求婚される前から彼に heart を与えていたと語られ、後期の情熱的主体的に生きる女性の一人となっている。

She had given her heart for good and all, as she owned to herself to Frank Greystock. She had owned to herself that it was so, and had owned to herself that nothing could come of it. Frank was becoming a man of mark without much money. Of all men he was the last who could afford to marry a governess. And then, moreover, he had never said a word to make her think that he loved her.¹³⁾

そして Trollope は、一世代又は30年前を舞台とする Victoria 朝作家の常とちがい、同時代を描く作家なので、この女性像は、作品発表年代である Victoria 朝後期の新しい女性像を反映しているといえる。

後期の Palliser Novels 全体が Whig 貴族を中心とし、Whig 貴族に関わる Liberal¹⁴⁾ の国会議員になろうとする青年を主人公とするため Barset Novels の田園風景とうって変って、華やかな Victoria 朝の上流社会、国会の開期中2月から7月までのロンドンの 'season', 国会が閉会になると country house に移り、狩猟、魚釣りを口実に政治交渉を行なうための house party といった生活が写し出される。その中心人物 Plantagenet Palliser は、第1作 *Can You Forgive Her?* では Duke of Omnium の相続人で、将来の大蔵大臣候補という下院随一の有望な政治家であり、その妻 Lady Glencora は当代随一の heiress¹⁵⁾ という新婚夫婦として登場するが、第4作 *Phineas Redux* の後半で主人公 Mr. Palliser は英国平民で最大の公爵領を継ぎ、第5作 *The Prime Minister* では首相になるという社交界、政界のまぎれもないエリートで、現代ではロマンスと読める作品群となっている。

Lady Glencora は、社交界に登場した18歳の年、貧乏貴族の次男で神々しいまでに美しい Burgo Fitzgerald を恋したのに、Mr. Palliser と政略結婚させられたという過去から、Victoria 朝的な理想の妻とはなりえな

い。「lady であるかどうか疑問だが、もし男性なら thorough gentleman だったろう」¹⁶⁾と作者が語る。自立した財産と、貴族のおおらかさを持ち、成功や力に憧れる野心的な紳士になれる特質をもちながら、いかにも女性らしい気まぐれを持つ魅力的な Glencora は後期女性の典型である。そして夢を求めて Victoria 朝社会の規範を超えようとする点で途方もないロマンス的特質の Don Quixote のような特性を持つのである。¹⁷⁾

この Lady Glencora に対し、夫の Mr. Palliser は完全な紳士と言及され、それは Whig 的理想主義と深く関わりをもっている。国会議員は、私利私欲を離れ全く報酬なしで国のために尽すからこそ職業の中の職業と Trollope の作品中では繰り返し語られる。Mr. Palliser 自身も貴族になり House of Lords に移籍し、the Lord Privy Seal という閑職になった時、政治の現実に関わる下院議員をうらやみ、自身も 10 進法貨幣に変更する法案に情熱を傾けていた House of Commons 時代を懐しむ。つまり国民に役に立っていると思える仕事をするのが、高い地位より幸福と考えるのだが、それと同時に Whig 貴族としての nobles oblige に基づく理想主義的政治理念が「完全な紳士」に不可欠なものである。それは Mr. Palliser に大蔵大臣に就くようすすめる the Old Duke の言葉としてまづ示される。

‘But, Palliser, think of it. If this were a small matter, I would not press you; but a man in your position has public duties. He owes his services to his country. He has no right to go back, if it be possible that he should so do.’ (CYFH? p. 622)

Palliser は Whig 貴族に生れたから Whig 党議員になり、国民の生活状態を改善しよう、国を前進発展させるため努力したいと思う。しかしこういう人間愛と愛国主義は Liberal と同じく Conservative にもあるが、Conservative は上流階級と下層階級の中の相異を保ったまま下層の人々が幸福になるよう義務を尽そうとすると Palliser は考える。

Let the lords be, all of them, men with loving hearts, and clear intellect, and noble instincts, and it is possible that they should use their powers so beneficently as to spread happiness over the earth. It is one of the millenniums which the mind of man can conceive, and seems to be that which the Conservative mind does conceive.¹⁸⁾

しかし Liberal として Palliser は上層階級が、完全な紳士としての気高い特質をもつとあてにできない。従って Liberal の理想は Conservative とは反対に上下の距離を平等に近づくまで、より小さくすることであると Palliser は政治理念を語る。

The Liberal, if he have any fixed idea at all, must I think have conceived the idea of lessening distances, —of bringing the coachman and the Duke nearer together,—nearer and nearer, till a millennium shall be reached by——’ (PM II. 321)

貴族として生れながら、人々のために働き、自らの地位、権力が小さくなり、無くなるのも辞さないという Liberal の理想に生きる Mr. Palliser は、人々にあくまでも寛大にそして自らには厳しい Trollope の理想の紳士¹⁹⁾であり、まさに完全な英国紳士といえる。

さらに quixotic にも昔の恋人と駆け落ちしたいとまで恋に憧れる妻 Lady Glencora の心を知った時、何年来そのために努力してきた大蔵大臣の職をなげうって妻の幸福のために1年間のヨーロッパ旅行をするという女性に対する騎士道的態度が Mr. Palliser のもう一つの重要な特質で²⁰⁾全体を支配する価値となっている。つまり、理想の英国紳士、Mr. Palliser が政治にも女性に対する態度にも ‘quixotic’ な特質をもつと作中で繰り返し指摘される。そしてこの完全な紳士、Mr. Palliser を補強する ‘quixotic’ な女性達が描かれることになる。

3

Palliser Novels の世界では女性も、国に義務を尽すことを理想とする政治家に接し、国会議員を何よりすばらしい職業と憧れる。第1作 *Can You Forgive Her?* で heiress, Alice Vavasor は、John Grey という申し分のない男性と婚約しながら、彼が学究的趣味だけに生きようとする田舎地主であることにあきたらず、女性にとってそういう平穏な結婚が人生なのだろうか。男性と同じように cause, 政治的目的を持たりたいのにと考える。

When she did contrive to find any answer to that question as to what she should do with her life, — or rather what she would wish to do with it if she were a free agent, it was generally of a political nature. She was not so far advanced as to think that women should be lawyers and doctors, or to wish that she might have the privilege of the franchise for herself; but she had undoubtedly a hankering after some second-hand political manoeuvring. She would have liked, I think, to have been the wife of the leader of a Radical opposition, (CYFH? p. 141)

こういう考えから従兄 George Vavasor の求婚が金めあてと知りながら国会議員になるために自分の財産を費い果たされても世の中に役に立つのだからかまわない。Radical 議員の妻になれば夫を介して政治に関わりができること愛してもいない George と結婚しようと Mr. Grey との婚約を破棄する。²¹⁾

第2作 *Phineas Finn* では Lady Laura Standish は、Phineas を愛しながらも彼のような無名の若い議員と結婚することは、Liberal の大物の娘として持つ政治的影響力を失うことだと知っているため、恋をあきらめ莫大な収入をもつ大臣候補の Mr. Robert Kennedy と結婚する。それ故単なる家政のとりしきりという妻の仕事に満足できず、「Reform Bill を議論し

たり、だれそれを昇任させたり、内閣に入れたりといった high politics に関わりたい²²⁾ と思う。Kennedy との結婚によって 'to do something in the world' (PF p. 276) を求めたのに裏切られることになる。²³⁾ 又、夫が政界で活躍する気力も知力もないと知って、Lady Laura は父や一族の政治力を使って Phineas の政治的昇進を助けることに情熱を注がざるをえない。しかし貧しい Phineas にとって有給の政府役人への昇進は、彼の自由な政治的信念を妨げると理解すると、彼の成功と政治的自由のために財産ある未亡人 Madame Max Goesler との結婚を勧めることまでです。女性が恋という個人的愛憎よりも政治的成功を重視するのは極めて特殊で、こういう Trollope の女性は quixotic である。この世界では恋や結婚においても政治が優先する。ユダヤ人銀行家未亡人としての財産をもつ Madame Max Goesler は、この Phineas の事情を察し、自分から Phineas に政治生活のために財産を使ってくれと申し出る。女性からお金を受けとれないという Phineas に彼女は 'Take the hand then first' (P. F. p. 683) と女性から求婚するのである。

同じくこの作品に登場する heiress, Violet Effingham は伯爵の長男である Lord Chiltern と幼馴染で7歳の時結婚の約束をした仲なのだが、互いに成人した今、何度求婚されても、Lord Chiltern が定職なく狩猟ばかりしていることが不安で結婚に踏み切れないとためらい続ける。最後に結婚を承知した時も、結婚してから Chiltern が無為なのは困る、働いてほしいと Violet は言うのである。こういうセリフを一生遊んで暮せる財産を持つ heiress が伯爵領の相続人にいうのは奇妙と言わねばならない。そして家族や Violet が Lord Chiltern にふさわしい職業と思うのは無給の国会議員なのである。

さらに Trollope の作品においては国会に野心をもつ青年の家族、それも母親や姉妹達が、国会議員になろうとする青年を崇拜し献身を示すのが特徴である。Cau You Forgive Her? では George Vavasor の妹 Kate が兄の立候補のために自分の財産を投げ出すばかりか、金持の伯母の companion になり少しでも George のため財産を出させようとする。

‘Because it is on the cards that she may help George in his career. I do not want money, but he may. And for such purposes as his. I think it fair that all the family should contribute. I feel sure that he would make a name for himself in Parliament; and if I had my way I would spend every shilling of Vavasor money in putting him there. (CYFH? pp. 90–1)

次に従妹 Alice の財産をめあてに親友である Alice に兄が愛していると偽ってまで Alice と兄とを結婚させようとする。

Phineas Finn において Phineas の姉妹達も国会議員になろうとする Phineas を熱狂的に応援し、自分達の持参金を削っても Phineas に選挙資金を出してやろうとし、そればかりか無給になった Phineas にこれまでより多くの手当てを父に出させるようにする。

第3作 *The Eustace Diamonds* でも国会議員をめざす法廷弁護士, Frank Greystock の母や姉妹は, Frank を愛する Lucy を個人的には好きなのに, 結婚相手としては貧しい家庭教師である Lucy を遠ざけ, England 一富裕な Baronet の未亡人 Lady Eustace との結婚をすすめるのである。

政治家に対する quixotic なまでの熱狂は, *The Prime Minister* においては, 夫が首相になると聞いてこれまで示したことのない程の崇拜と賛美を Lady Glencora が示すことにまず表われる。

Never since their first union had she been so demonstrative either of love or admiration. ‘Oh, Plantagenet,’ she said, ‘if I can only do anything I will slave for you.’ As he put his arm round her waist he already felt the pleasantness of her altered way to him. She had never worshipped him yet, and therefore her worship when it did come had all the delight to him which it ordinarily has to the newly married hero. (PM I. 58)

自分の人生をこのように政治と結びつけたいと願う女性達は Liberal 又は Radical の国会議員をめざす若者を恋する Liberal の女性で, 下層のた

め進歩をめざし働こうとする Whig の理想主義に影響されて、Liberal の男性を高潔な騎士的紳士と思う。従ってドン・キホーテがロマンスにまどわされて、風車を人間と見誤ったように、又 Charlotte Lennox の *The Female Quixote*²⁴⁾ のヒロイン Lady Arabella が、人を皆ロマンスの人物のように見ようとして失敗を犯すのと同様に、Trollope の女性達もこの政治的理想の幻想にまどわされ、判断を誤まることになるのである。私利私欲をはなれ無給で国のために尽す地主階級が国会議員であった歴史的事情から国会議員をめざすというだけで女性達は hero として崇拜するのである。

4

Trollope のヒロインの中で最も 'quixotic' な特質をもつ Lady Glencora はロマンスを愛し、ロマンスに熱中する。まさに 'Female Quixote' そのものである。昔の恋人 Burgo を愛するからというより面白味のない冷静な夫 Mr. Palliser がものたりず、Burgo との駆け落ちにロマンスを感じたり、夫の騎士道的態度に感動し、それまで愛してなかった夫の妻として生きようと決意する人生の転機においても、'Eustace Diamonds' の謎に夢中になったり、真冬の夜、picturesque の廃跡を散歩したり、直観的に気に入った人を因習に縛られずにうけ入れ交際し、共感を持つとかいう好みの問題でも、又、夫 Mr. Palliser の貧しい従妹 Adelaide Palliser に 25,000 ポンドもの持参金を作ってやって結婚を可能にしてやったりといった貴族的気まへのよさにも 'quixotic' な性質がみられる。現実を無視して人生をロマンスのように見、ロマンスのように生きようとする 'Female Quixote' の Lady Arabella と同じ衝動的なロマンス好みの Lady Glencora の態度が彼女に数々の誤ちを犯させるが、この Lady Glencora が華やかな中心人物になる *The Prime Minister* を次に中心的にとりあげたい。

Lady Glencora の物語と double plot をなす Emily Wharton の恋の plot も Trollope の女性の quixotic な特質を示し、彼女が、Lady Ar-

abella の系譜にあることを明らかにする。古くからの Baronet 家を head とする Tory の家柄の娘 Emily が一族中の望む結婚相手 Arthur Fletcher をすて、彼女の 60,000 ポンドの持参金をめあての adventurer, 相場師 Ferdinand Lopez を紳士だと言いはり、父の反対を押しきって結婚する。²⁵⁾ Lopez が彼女の父の財産を調べてから口説き始めたとも知らず、父に反対されればされるだけそれだけ父の偏見を責め、偏見なしに彼自身を愛する純愛こそ正しいと思ひ込む。彼女が Arthur をすて Lopez を恋するのは、Lady Arabella が父親のきめた従兄 Charles Glanville²⁶⁾ との結婚はロマンスがないと思うのと同じである。このようなロマンスに対する幻想から Lopez の偽りの仮面に欺かれ、人物を見誤ってしまうのである。²⁷⁾

In a sense he was what is called a gentleman. He know how to speak, and how to look, how to use a knife and folk, how to dress himself, and how to walk. But he had not the faintest notion of the feelings of a gentleman. (PM II 203)

Emily の父 Mr. Wharton はこういう Lopez をいわゆる英国紳士ではないと判断し、Emily を恋する Arthur は ‘disgustingly indecent’ (PM. II. p.180) な人物と見るのに、Emily は Lopez の作られた紳士らしい外見に欺かれてしまう。Mr. Wharton の Lopez に対する反対は、いかにも紳士階級らしい排他的なもので、自分と同じ地主階級出身でないことを嫌い、英国人とは違う浅黒い容貌からユダヤ人ではないかと疑うのである²⁸⁾。それは野望をもつ ‘outsider’²⁹⁾ を受け入れまいとする Victoria 朝紳士階級の態度を明らかにするものである。

たとえ富裕な生活をしていても、働いて収入を得ているのではあてにならない。不動産がないなら労働所得でなく確実な資本金がなければならない。この考えから City の人と娘を結婚させたくない Mr. Wharton は言う。³⁰⁾ 又たとえ経済的に安心でも、父母が誰ともしれぬ Lopez は紳士ではないと Mr. Wharton は反対する。そして Lopez は外国語もうまく教養人という息子 Everett に対し、現代語の会話はガイドやホテルの受付には役

立つが紳士としては古代ギリシア・ラテン語の素養が望ましいと語る。しかし古代語でなく現代語をものにしてしている点でも、紳士階級の生れでなく労働所得により成り上った点でも Lopez は単なる悪人でなく、資本主義の未来に生きる現代人を予測させる新しい人物である。³¹⁾ だが Victoria 朝紳士階級は、こういう外枠の特性の中に秘そむ紳士としての心情を信ずる故に outsider を受け入れないのである。³²⁾

Trollope によると紳士には紳士らしい 'feeling' と 'social position' が必要であるが、'social position' をいわば見せかけと結婚によって得ようとする「現代人」Lopez の feeling がこの作品では問題にされている。Mr. Wharton の主張するように労働所得だからいけないのではなく、Lopez が金だけが 'social position' を獲得するもの、紳士階級への門を開ける³³⁾ものと思ひ込み、金に執着することが紳士の feeling をもたない事として描かれる。たとえば、紳士階級に生まれ持参金をもつ Emily は愛のために heiress の安楽をすて Lopez と結婚するのと反対に、Lopez は Emily の自分への愛をなえさせても、Emily を義父に売ってまで Mr. Wharton から金をしぼりとりとうとする。この金への執着により、Lopez は紳士の 'feeling' を持たぬことを暴露し、その時、彼は紳士の社会的地位も失ない破滅する。

Lady Glencora も Emily と同じく、Lopez の語る恋のいきさきにロマンスを感じ、Lopez を 'my black swan' と呼び、お気に入りにしたために、夫を苦しめ夫の首相引退を導くという誤ちを犯す。Lady Glencora が夫の首相任期を長くと願うために、City の利益代表として首相邸のパーティに現われた Lopez に近づき、さらに初恋の人 Burgo にも似た美貌 Lopez³⁴⁾の外見と態度に欺むかれ、Mr. Wharton がユダヤ系ではと疑う名前をラテン名は悪いはずがない、ロマンスがある³⁵⁾という。恋人の父 Mr. Wharton の反対をロマンス的に語る Lopez は 'Sheer love!' と Duchess を感激させる。Mr. Wharton を評する 'out and out Tory' という言葉は急進的 Liberal の夫を持つ Lady Glencora に Mr. Wharton を非難させ、Lopez に同情させるものである。

Lady Glencora の衝動的な実際性に欠けたロマンス好みが Lopez に近づかせ、さらに代々 Palliser 家の領地の小選挙区 ‘pocket borough’ である Silverbridge の補充選挙に彼を Duke の指名候補として立たせ、彼を国会議員にしてやろうと計画することになる。理想主義の Duke は ‘It is not for me to return a member for Silverbridge’ (*PM*. I. p. 235) というのに対し、Lady Glencora は姻戚関係があるからではなく、‘merely for his (=Lopez) worth’ (*PM*. I. 235) のために後援するのだからと quixotic にいうが、これはまさに Emily が父に偏見さえなければ Lopez が紳士であることがわかるはず、と主張するのと同じく幻想にまどわされている。女性をまどわす性的魅力はあっても、女性や庇護者を決して傷つけない紳士としての彼自身の価値こそが、Lopez にないものなのであるから。

さらに Lady Glencora も Emily も自立、自由を求めて、それぞれの階級の中の規範をこえて、自分の力を確かめたい、規範をこえることこそ grand だというロマンス的思いがある。³⁶⁾ そこで Emily は父の紳士階級的観点を偏見と退け、自分の判断の方が因襲をこえすばらしいと思い、父の世界を脱け出し Lopez との結婚を強行する。Lady Glencora は、夫の理想主義を知りながら、あまりに良心的すぎると思い、現実には利用すべきは利用し、利権の見返りに夫への忠誠を得た方がよいのだと考える。領地選挙区を利用しないという夫に逆っても、夫の理想主義の規範に逆っても、忠誠な部下を得ることは夫のためになるのだというロマンス的幻想に支配されているのである。さらに夫とは別に自分も政治的力があることを試してみたいと思う。

She certainly had a little syllogism in her head as to the Duke ruling the borough, the Duke’s wife ruling the Duke, and therefore the Duke’s wife ruling the borough; but she did not think it prudent to utter this on the present occasion. (*PM*, I. 237)

‘castle interest’ を使い、首相夫人たる自分は首相を動かせると世間に示したいという欲求がある。このように自分の属する世界の規範をこえて

自由に行動しようとする Lady Glencora も Emily も社会にはむかう人、‘rebel’³⁷⁾であるといえよう。

「もし私が首相だったら夫のできない下劣な仕事だって私が処理して夫には有益なきれいな仕事だけさせてあげるのに」(PMII, 186) という Lady Glencora の言葉は、彼女が単なる妻以上のことをしたい³⁸⁾と思う自立を求める気持を明らかにする。夫の首相としての失敗を見て、私が首相ならよかったのにといい彼女の ‘natural desires’³⁹⁾であり、一面直観的賢さをもち夫より現実的なため ‘grand thing’ をなしとげたい夫の理想主義の弱さや、政治に不可欠な社会的な要素を見ぬいていることを示す。

しかしこの世の中では、女性は政治的に劣った立場で選挙権は与えられず、政治に携さわろうとしても社交上でしか、又夫の背後からの術策を通じてしかない。彼女の不公平だという叫びは心からのもので、最高位の貴族の Lady Glencora でさえも女性としては抑圧され、⁴⁰⁾ 憤り、自立を求めていることを示す。その自分の力を示すことが、夫に従わず全閣僚を招待する house party をやり、Lopez を下院に送ることであったのである。Glencora の政治についての考えは、社交重視で政策をわかっておらず、一世紀も遅れていると酷評されるが、⁴¹⁾ 他方 Disraeli が、社交の面を軽視する首相 Lord Derby を批判したという史実がある⁴²⁾ということから、彼女の誤ちは、ロマンスに憧れる quixotic な彼女の性格によることに注目しなければならない。又、小選挙区廃止の動きにもかかわらず、貴族の支配と恩恵を領民たる選挙区の人々が望んでいるから、又夫のためになるからという名目で自分の力を試したかった Lady Glencora の自立を求める心によることが重要であろう。

彼女に当然な欲求を閉ざされた Lady Glencora は政治的力を揮いたいためあまりに原理原則をいう夫を高く評価できない。Duke は野心をきらうのに、Lady Glencora は決して到達できない成功に憧れる⁴³⁾からである。Coral Lansbury は、⁴⁴⁾ 首相の妻として力に憧れるがその特権に伴う責任、正直さ、夫の理想主義を理解しなかったためまちがいを犯すと言うが、Robert M. Polhemus は⁴⁵⁾ 夫婦が互いに愛しているし相手に ‘devoted’ だ

と思っているが実は完全に相手を‘appreciate’しがたいと現代の‘isolation theme’につながる特徴としてとらえる。感情的衝動的に Lopez を応援する Lady Glencora に対し、理性的な Palliser は、選挙法改正法案の審議の最中、領主貴族の特権⁴⁶⁾を用いることはできないと、指名候補はたてないと声明を出す。

Silverbrige の選挙には、結局 Lopez が立つと知らずに彼より後に立候補した Arthur Fletcher が当選する。この顛末に Duchess に裏切られ、Emily の昔の恋人に敗れたと怒った Lopez は Duke に抗議の手紙⁴⁷⁾を書く。それを読んで妻 Glencora を非難から守らねばと感じた Duke は選挙費用 500 ポンドを払う。これがかえって Duke が首相なのに Lopez に領地選挙区の特権を使おうとしたと認めることになり醜聞になり Duke は退陣せざるを得なくなる。彼女の quixotic な行為により、夫の長い政権は不可能になったのである。

結局、rank と wealth が与えうる限りのものを持った二人の女性 Lady Glencora と Emily Wharton が quixotic にも自分の判断だけを信じ、自由を求めて行動した結果、最も熱望したものを捨てることになる。それも二人とも、悪人 Lopez を紳士と見誤ったという、Lady Arabella, ‘Female Quixote’ の一番初歩的なまちがいを犯したからなのである。

それなのに、Lady Glencora が Duke の反対に逆らい、干渉したために醜聞となった時、Duke は、妻に世間の責めを負わすわけにはいかないと、自分が非難を甘受しようとする。公人である首相として退陣を余儀なくされても Palliser は妻の名誉を守ろうとする。これはまさに騎士的紳士の行為である。Lady Glencora に彼の価値をわかりながらも、欠点を見ずにいられない洞察力のある女性としてこの事を喋らせ Trollope はリアリストらしい一面を示す。

‘Though in manner he is as dry as a stick, though all his pursuits are opposite to the very idea of romance, though he passes his days and nights in thinking how he may take a

halfpenny in the pound off the taxes of the people without robbing the revenue, there is a dash of chivalry about him worthy of the old poets. To him a woman, particularly his own woman, is a thing so fine and so precious that the winds of heaven should hardly be allowed to blow upon her. He cannot bear to think that people should even talk of his wife. And yet, Heaven knows, poor fellow, I have given people occasion enough to talk of me. (PM II 185)

同じように、Lopez のような悪人と結婚して身を落したと Emily が批判されても Arthur だけは、相変らず Emily は 'perfect' という。この 'as true as heaven' (PM I 190) のような Arthur の愛が Emily を救い、誤ちを犯し、深く傷ついた Emily⁴⁸⁾ をたちなおらせる。

こうしてみるとこの *The Prime Minister* という作品は *The Female Quixote* の系譜をひき、Jane Austen 流の 'education theme' を扱っていると考えることができる。⁴⁹⁾ すなわち Lady Glencora と Emily Wharton の誤ち、目覚めがあり、二人の成長によって 'knight' たる夫、又は恋人と結ばれるというものである。

しかし Trollope は単なる 'Female Quixote' 的 happy ending に終らせず、いかにもリアリストらしい彼にふさわしく心理的な一ひねりをつけ加えている。すなわち二人ともその生きる社会の反逆者であったのに、結局不満をもったまま枠に再び入らなければならない。二人の失敗を確かに騎士たる男性が救ってくれるが、それに果して彼女達は満足し続けたであろうか、という疑問が残るのである。

先ず Emily の方は、もともと自分の階級の因襲を憎み、そこから脱けだすためにその階級の考えを偏見と退けて結婚したのに、Arthur との結婚は常に何でも dictate する Lopez (PM I 334) ほどひどくはないが、いつまでも自虐的不幸に沈む Emily に Arthur は結婚を命令し従わせるのだから、彼女の求めていた自由とは相反する世界にそして一旦脱けだした因襲的世界に戻ることを意味するのである。

Lady Glencora は Mr. Palliser が引退が決まって、いつも牧歌的田舎に暮らすことを夢みていたのだからと妻を慰める時、彼女は口返答はしないものの‘stupid’(PM II, 125) だと思ふところに表わされている。二人はどうしても完全には理解し共感できない。そしてそれをすでに *The Prime Minister* の巻で気づいている Lady Glencora は次巻冒頭で‘She is dead’ と語られることになるのである。

単なるめでたしめでたしでなく二人の人間の超え難い間隙、愛していても理解し難い面があることを示す点で、この作品は心理的にも秀れたものとなっている。階級社会の最高位にある故に Mr. Palliser も又 outsider という Polhemus⁵⁰⁾ をまつまでもなく、疎外感が主人公の重要な資質、物語のモチーフとなっている 19 世紀末の世界文学全体の潮流⁵¹⁾とも結びつく問題を取りあげている。そして政治が個人を表わし、異質の個々の人が相容れることができない(政治的連立内閣のような)人間関係を示す点で、Duke を中心とする貴族社会から、Wharton 家を中心とする紳士階級そして貧しさにあえぐ City の株屋 Sexty Parker 一家までパノラマ的に描きながら、それぞれがちょうど Lady Glencora と Emily の類似関係、相反関係の如く、微妙にからみあった心理的關係となっている点が *The Prime Minister* の特質であり、秀れた点である。

5

結局 *The Prime Minister* という作品は Trollope の作品中でも最も‘quixotic’な誤ち、山師 Lopez を紳士と思って恋し、結婚した Emily の誤ちを恋物語の軸として、紳士でない Lopez を国会議員にふさわしいと思って、政治的影響力をふるおうとした Lady Glencora の失敗を描き、個人生活と公的生活、又は政治的生活の交錯を描き続ける Palliser Novels の中でも完成されたものとなっている。このパノラマ的イギリス社会の描写は、トルストイに感銘を与えているし⁵²⁾、Lopez という新しい世界に生きる人間を時代に先駆け描いたことは注目に値する。

さらにこの小論の主題である Palliser Novels の女性達は、人生の目的

を政治的にとらえたいとする quixotic な熱中に特徴がある。その思いを恋人や夫に托さざるをえない女性達は、その情熱と主張ゆえに、又結婚でなく政治的目的を求めることに特質があり、又はただ妻ということだけではあきたらず Liberal の政治家の妻として社交的にでも政治に参加しようとするのである。彼女達は明らかに、大人しく自己犠牲的な Victoria 朝前期の女性とちがい、時代に反抗する反逆者である。19世紀の制限の中で自由に生きるため Trollope は彼女達に上流の heiress という立場を与えている。⁵³⁾ 彼女たちは quixotic な特性ゆえに誤ちを犯す愛すべき女性ではあるが、規範を破ってまで自由を求めることに新しい女性を感じさせる。そしてこのような女性が脇役ではなくヒロインであることに、Gissing, Meredith, George Orwell などの世紀末から 1900 年代初めの 'new woman' へと続いていく流れを作ったといえよう。

しかし婦権運動や女性解放運動に反対し、女性の幸福は家庭にありと主張する Victoria 朝人 Trollope は、最後には誤ちを犯した女性が後悔し、騎士的な夫や恋人の愛によって救われるという常識的結末を用意している。⁵⁴⁾

さらに Trollope の女性達の quixotic な政治への熱中は、新しい女性という視点以外に極めて Trollope 的特質を、又 Victoria 朝後期の時代を明らかにしている。すなわち Conservative でなく Liberal の思想に染った女性達で自らは heiress なのに恋人の貧しさをものともせず愛に生きようとする、Victoria 朝の基準を超えた情熱的な女性である。⁵⁵⁾

常に進歩をめざし改革をと考える Liberal の貴族や国会議員を愛するためか新しい動きに敏感で、婦権運動を自分の思いを通そうとする時言及し、必ずしも夫や恋人に従ってはいない、教養ある知的な女性達が描かれる。「妻の夫への屈服が一般的理論であるが、実際は強い方が率いている」というリアリスト Trollope の態度⁵⁶⁾を反映した Victoria 朝を超えた関係が描かれている。

さらに注目すべきなのは、義務という Victoria 朝家庭的美質を国会議員や政治家の第1の条件としていること、従って最高位の Duke が自らの

身分の安泰よりも民主主義のために平等を説き、人々のために勤勉を惜しまず無給で働くことを理想とすることである。それができない Lopez のような金に執着し、利己的な人物は悪人として描かれるわけである。こういう理想主義は Victoria 朝的向上主義と結びつき Victoria 朝中流階級の価値である。さらに Violet Effingham の言うたとえ伯爵の後継ぎであっても、怠惰ではいけない、議員のような職をもって働いてほしいと職業を重視し勤勉を賞賛するのも当然中流の価値である。

このように上流貴族達を描きながら、義務、勤勉、職業、向上といった中流的価値を重要とするところに Trollope の特徴がある。そしてこういう Trollope の特徴が、リアリストとしての風俗描写、微妙な言葉づかいの正確な描写というだけでなく Victoria 朝社会の精神性を理解するのに適切な文学となっている。

政治に憧れる女性達にしても、新しい女性として自由を求める 20 世紀の女性像につながるのだが、一方では 18 世紀以来の Richardson 流の恋の伝統をせおい、Female Quixote 的ロマンス好みの性癖をもった女性であるという矛盾した魅力の混合であることも重要である。

新しさに気づいている Trollope だが、現実には変化に抵抗するイギリス社会というものを知っているので、自由を求め反抗した Emily が Fletcher と結婚するように、Lady Glencora が政界の女王の夢を捨て、首相引退した夫とひきこもるように、現実のイギリス社会より少し進んだ liberal な視点で Emily と Lady Glencora の無念さを描き、単なる happy ending にしないリアリストらしい心にくい巧みさを示す。物語の構図自体は Tory 的価値の賛美のようであっても作者がそれを残念な気持で嘆き、よりすすんだ視点をもつ理想的人物 Mr. Palliser を示すことにより、単なる Victoria 朝小説を超えた見通し、価値を持っている。上流社会を描き、中流的価値の賛美があるために、読者に Victoria 朝社会は安泰と思わせるが、その価値が、又社会が変りつつあることを Trollope は敏感に作者の眼で見ているのである。

それ故、妻さえ売ろうとする Lopez も単に金に執着する悪人というだ

けでなく、紳士になりたい、社交的に認められたいと彼が真実思っている故に傷つき死なねばならないと Trollope は描く。Lopez の outsider の苦しみは現代小説の疎外感へと続くものであるが、この点を主張する R. M. Polhemus は Tenway Junction での Lopez の投身自殺は、機械文明に敗れる人間、駅の群集の中でさえ目立つ Lopez の outsider の特性という象徴性を示すとみごとに分析している。⁵⁷⁾ 悪人ではあるが、資本主義を代表する新しい時代の人間という矛盾を Lopez の中に描いて Trollope は彼の自殺に悲劇性をもたせている。

又、この作品では coalition を Palliser が首相で異なる党派の大臣が協力を目ざす連立内閣という政治的な面と異質の又階級の異う人同志の結婚という個人的なものとの二面から描く。政治的連携に Palliser は失敗し、政界を退き、Lopez は個人的連携に失敗して破滅する。紳士的美徳と理想主義をもつ作品の politicians の中で唯一人の真の statesman⁵⁸⁾ である Palliser が失敗したことは、地主階級の封建的な庇護によって国を改善しようとする政治のアマチュアの時代の終了⁵⁹⁾を示す。Palliser のような国に義務を尽す理想主義だけでは政治が不可能な、紳士階級の時代の終りをも示している。

こういう悲観的見通しの中にあって quixotic な女性達は、政治に夢をもち、新しい時代へ向けて自立しようという動きで、作品を生き生きとした興味深いものになっているのである。

※本稿は1987年4月29日、名古屋大学英文学会昭和62年度総会において口頭発表したものに、加筆修正したものである。

[注]

- 1) Henry James, 'A Posthumous Revaluation' (1883) *The Barsestshire Novels: A Selection of Critical Essays* ed, by Tony Bareham (London: Macmillan, 1983), p. 64
- 2) 'the great praise of her beauty which came from her old friends, appear marvellously exaggerated to those who were only slightly acquainted with her.' Anthony Trollope, *Barchester Towers* (Oxford: Oxford University Press, 1980) p. 145 以下, 一度引用した作品からの引用はタイトルの省略英語と頁数のみによって示す
- 3) Madeline は後期の女性と似た特徴をもつが前期ではこのタイプは脇役にすぎない。
- 4) 初期 Barsest Novels のヒロイン達
The Warden (1855) Eleanor Harding 牧師の娘
Barchester Towers (1857) Mrs. Eleanor Bold (前作の Eleanor と同一人物)
Doctor Thorne (1858) Mary Thorne 医師の姪
Framley Parsonage (1861) Lucy Robarts 牧師の妹
The Small House at Allington (1864) Lily Dale 地主の姪
The Last Chronicle of Barsest (1867) Grace Crawley 牧師の娘
- 5) Ian Watt, *The Rise of the Novel* (London: Chatto & Windus, 1967) p. 155 及 p. 161
- 6) Anthony Trollope, *The Small House at Allington* (London: Dent, Everyman's Library, 1976), p. 65
 この作品は, この小論でとりあげる後期作品 'Palliser Novels' との link である故に純愛に殉じるという意味においてで後期作品のヒロインの quixotic な特質をヒロイン Lily Dale はもつ。又, すでに前作 *Framley Parsonage* で Lucy Robarts の恋を応援する彼女の義姉は Don Quixote だと言われる。Anthony Trollope, *Framley Parsonage*, (Oxford: Oxford University Press, 1980), p.490
- 7) Barsest Novels のヒロインはいづれも貧しい娘であり, 身分ある恋人との結婚を家族, 特に恋人の母親に反対される。
- 8) Richardson, *Pamela* の subtitle が 'Virtue Rewarded'
- 9) こういう plot は性的に抑圧されていた Victoria 朝において兄妹のような恋とか従兄妹同志の恋が一般に受け入れられやすかった特質を明らかにする。
- 10) Anthony Trollope, *Doctor Thorne*, (Oxford: Oxford University Press, 1980), p. 93
- 11) Dickens, *Bleak House* の Esther Summerson や *The Old Curiosity Shop* の Nell, *Dombey and Son* の Florence Dombey, George Eliot, *Silas Marner* の

Effie など。

- 12) Juliet McMaster, *Trollope's Palliser Novels* (London: Macmillan, 1979) p. 167
- 13) Anthony Trollope, *The Eustace Diamonds* (Harmondsworth, Middlesex: Penguin Books, 1969), p. 64
- 14) 19世紀に Tory は Conservative に Whig は Liberal と呼ばれるように変わっていった。英国史上初めて Liberal が政権をとったのは1868年の Gladstone 内閣の時。cf. David Thomson, *England in the Nineteenth Century* (Harmondsworth; Middlesex, Penguin Books, 1950), p. 239
1875年作のこの作品では党名は Liberal, Conservative であり, Whig, Tory は時代遅れのいい方である。
- 15) Trollope は realist らしく各 heiress の財産金額を明示しているが, Lady Glencora だけはそれがなく公爵位の Palliser 家より多い財産で社交界に登場した女性の中で最大の heiress とか莫大なことのみ言及がある。なお, Lady Glencora という呼び方について, 実は, 中心にとりあげた *The Prime Minister* で彼女は Duchess になるのだが Lady Glencora という呼び方の方が彼女の人物を語るのには相応しいと思えるので, この小論では Lady Glencora という呼び方を続けている。
- 16) Anthony Trollope, *Can You Forgive Her?* (Harmondsworth, Middlesex: Penguin Books, 1972) pp. 523-4
- 17) 実は後述するように Don Quixote そのものより Don Quixote 的特性を持つとして描かれ, 喜劇的にロマンスに憧れる *The Female Quixote* の Lady Arabella に似ていることからこの小論をおこした。
- 18) Anthony Trollope, *The Prime Minister* (London: Oxford University Press, 1970) II. p. 320
以降この引用はタイトルと頁数のみにて示す。
- 19) Trollope は自身を 'an advanced, but still a Conservative-Liberal' と言っている。1868年には Liberal candidate として立候補した。A. O. J. Cockshut, 'Trollopes' Liberalism,' *Anthony Trollope*, ed, by Tony Bareham (London: Vision, 1980) pp. 163-4
- 20) これも 'duty' である。弱い者に対する義務は Trollope の人物の理想的特質である。'he know that his wife's safety was his first duty.' *CYFH* ? p. 625
- 21) 'Palliser Novels' における女性の心変りは, 上昇婚をねらうのではなく heiress が財産を男性に与えるために心変わりするものでその最初の例。
- 22) Anthony Trollope, *Phineas Finn* (Harmondsworth, Middlesex; Penguin Books, 1972) p. 242
- 23) Lady Laura の不幸な結婚生活は *Middlemarch* の Dorothea の先駆けであ

り、さらに James の *The Portrait of a Lady* の Isabel Archer の結婚生活へと続いていく。

- 24) Charlotte Lennox, *The Female Quixote* (London: Oxford University Press, 1970)
- 25) *The Female Quixote* のヒロイン Lady Arabella は Marquis の一人娘で孤立した邸の中で育ち、空想とロマンスに生きているため父の決めた結婚相手で従兄の Charles Glanville との結婚をロマンスがないと嫌がり、持参金めあてに甘言を弄する Sir George に愛してもないのにロマンスがあると喜ぶ、この点 Emily はそっくりである。
- 26) Arthur は Emily の一種の cousin. Emily の従姉が Fletcher 家の当主 John Fletcher と結婚しており、Arthur は John の弟。
- 27) Lady Arabella は容姿の美しい庭師 Edward を、その外見の故にロマンス的 illusion をもち彼は素性を隠した良い家柄の男性で、自分 Lady Arabella を恋して身をやつしていると思うが、彼の様子が変だったのは、庭の鯉を盗むためだったとわかる。
- 28) こういう紳士階級の英国人にこだわる人種偏見も Victoria 朝的である。
- 29) Robert M. Polhemus, *The Changing World of Anthony Trollope* (Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1968) p. 198
- 30) しかし Mr. Wharton の barrister としてのロンドンでの労働所得による蓄積が (一種の city cash) 魅力となって、Wharton-Fletcher alliance が考えられているのは irony. cf. Geoffrey Harvey, *The Art of Anthony Trollope* (London: Weidenfeld & Nicolson, 1980) p. 152
- 31) ‘Lopez, the new man and the would-be capitalist’ Robert, M. Polhemus, *ibid.*, p. 198
- 32) Lopez は多くの批評家によってこの点で、ほぼ同時期に書かれた *The Way We Live Now* の Melmotte との類似を指摘される。
- 33) R. M. Polhemus, *ibid.*, p. 199
- 34) Burgo は人を欺むく悪人ではないが、美貌を利用して heiress と結婚し、他人の金で安楽に暮そうとする点で Lopez と共通点をもつ。
- 35) しかし gothic novels 以来、悪人の名はラテン系である。さらに Lopez にはエリザベス I を毒殺しようとして処刑された Dr. Roderigo Lopez の暗示がある。Robert Tracy, *Trollope’s Later Novels* (Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1978) p. 55
- 36) 自由を求め、規範をこえたいという気持が Lady Glencora や Emily の quixotic な行動を導く事が重要な点で、元祖の Lady Arabella は 1752 年の作品らしく単にロマンスに従おうとして quixotic な行動をするというのが同じ ‘quixotic’ であっても大きく異なる点である。

- 37) James R. Kincaid, *The Novels of Anthony Trollope* (Oxford: Clarendon Press, 1977) p. 218
- 38) Lady Glencora は 'not contented to be known simply as the wives of their husbands.' (*PM* I pp. 60-1) と語られる。
- 39) James R. Kincaid, *ibid.*, p. 221
- 40) Coral Lansbury, *The Reasonable Man: Trollope's Legal Fiction* (Princeton: Princeton University Press, 1981) p. 220
- 41) *Ibid.*
- 42) R. Tracy, *ibid.*, p. 51
'Lord Derby was reluctant to entertain certain supporters.' see Blake, *Disraeli*, pp. 359-360
- 43) R. M. Polhemus, *ibid.*, pp. 211-3
- 44) Coral Lanbury, *ibid.*, p. 220
- 45) R. M. Polhemus, *ibid.*, p. 211
- 46) 貴族が自分の領地の代表として自分を支持する国会議員を送る pocket borough の制度は、貴族にとってうまみがあるものであったが、Liberal としては自らその制度を廃止しなければならなかった。
- 47) Lopez の手紙は Duke への呼びかけに your Grace を 20 回以上も使い、こびへつらいが多すぎると感じられ、Lopez が真の紳士でないと示す。K. C. Phillipps, *Language and Class in Victorian England* (Oxford: Basil Blackwell, 1984) p. 156
- 48) Andrew Wright によればこの作品の最上のものは、'the gradual revelation to Emily Lopez of the truth of her husband's character.' Andrew Wright, *Anthony Trollope: Dream and Art* (London: Macmillan, 1983) p. 110
- 49) 批評家達は主として Emily の方の education を説く。cf. Andrew Wright, *ibid.*, Kincaid, *ibid.*, p. 220
Robert Tracy は類似と対照の Diagram により Emily と Duchess の心理的類似を示す。R. Tracy, *ibid.*, p. 53
Juliet MaMaster は、初め Emily は父から、Glencora は夫から望むものを得ようとして、自分の思いをとおすが後悔すると説く。Juliet McMaster, *ibid.*, p. 105
- 50) R. M. Polhemus, *ibid.*, p. 212
- 51) Lopez は Julien Sorel, Barzarov, Raskolnikov, Hyacinth Robinson のような outsider の一人。R. M. Polhemus, *ibid.*, p. 204.
- 52) *Anna Karenia* 執筆中の Tolstoy はこの作品を読み賞賛。Kincaid, *ibid.*, pp. 216-7
Lopez の自殺は *Anna Karenia* のそれに似ている。Harvey, *ibid.*, p. 156

- 53) 自由な自立した heiress という状況は Henry James の *The Portrait of a Lady* にと続いていくものである。
- 54) Juliet McMaster はこういう feminism に対する Trollope を ‘an advanced, but still a conservative liberal’ というよく知られた句で語っている。Juliet McMaster, *ibid.*, p. 179
- 55) Lady Laura (*Phineas Finn*) のように、結婚できない Phineas に対して悲劇的な報われない恋を捧げる女性もある。
Trollope は Victoria 朝の道德規範をはなれてヒロインに情熱的人生を持たせた。Juliet McMaster, *ibid.*, p. 169
- 56) ‘In ordinary marriages the vessel rights itself, and the stronger and the greater takes the lead, whether clothed in petticoats, or in coat; waistcoat, and trousers.’ Anthony Trollope, *The Belton Estate* (London: Oxford University Press, 1986) p. 132
- 57) R. M. Polhemus, *ibid.*, pp. 205–209
- 58) G. Harvey, *ibid.*, p. 147
- 59) R. M. Polhemus, *ibid.*, p. 207